Malamud 批評の傾向と特質―その達成と欠落を巡って

前　田　譲　治

要旨

マラマッド文学のユダヤ的特質の分析に焦点を当てた、書物の形で刊行された諸評論を網羅的に鳥瞰した。すると、イディッシュ文学、ユダヤ教に関する著述などの文筆活動に読み取れるユダヤ人の過去が、作品内容とどのような形で通じているかを論じた評論が極めて多数を占めることが判明した。あるいは、ユダヤ人固有の歴史に対するマラマッドの姿勢が、繰り返し分析されている事実が分った。他方、作品執筆時の現実との関連性から、マラマッド文学のユダヤ的特質が分析されることは殆どなく、ユダヤ人固有の価値観や美意識と作品との関係にも目が向けられない。また、ユダヤ的特質が論じられる際には、作品の極めて限定された一側面のみが俎上に上がる。さらには、ユダヤ史への言及に際しては、歴史書などの二次資料による論証が殆どなされない。既発表の評論には、以上のような欠落が見出せる事実を踏まえて、二次資料を使用した形で、作品執筆時のユダヤ人の精神構造と、作品全体が伝える世界観、人間観との関連性に焦点を当てた、マラマッド文学のユダヤ的特質の分析の必要性を訴えた。

キーワード

マラマッド、批評、シュレミール、イディッシュ、ユダヤ教、ホロコースト

序論

Bernard Malamud[1] の作品の圧倒的多数は、ユダヤ人を主人公とする。ユダヤ人は、彼の長編小説 7 作品中、*The Natural* を除いた全作品の主人公となる。短編集に注目しても、*Pictures of Fidelman* では、Arthur Fidelman というユダヤ人が全編の主人公である。他の短編集では、*Magic Barrel* においては13編中 8 編、*Idiot First* では12編中 9 編、*Rembrandt's Hat* では 8 編中 2 編がユダヤ人を主人公とする。『レンブラントの帽子』においては、ユダヤ系主人公が登場する割合が作品数の点では低い。しかし、ユダヤ人を主人公とする作品が全体に占めるページ数の観点から見ると、半分弱にまで割合が増大する。また、マラマッド文学には、ユダヤ人固有の言語であるイディッシュ語[2]や、ユダヤ人固有の習慣も頻出する。

上記のマラマッド文学の特質を反映し、マラマッドがユダヤ人である事実を注視しつつ、作品を分析した批評も多数発表されている。そこで、本稿においては、無数に発表されたマラマッド批評の中から、彼がユダヤ系作家であることに特に注目して作家論、作品論を展開し、かつ、書物の形式で刊行されたものを鳥瞰したい。それらの批評は当然、作品の主題や世界観にまで言及することが多いが、マラマッド文学のユダヤ的特質を論じた箇所のみを概観する。この形式で、それらの批評群に内在する、マラマッド文学のユダヤ的特質の分析に関する方向性を探求したい。本稿は、特定の主題に関するマラマッド批評の趨勢を再確認することを目的の一つとする。さらに、その動向を踏まえて、マラマッド文学のユダヤ的特質を追求する批評において欠落している視点を確認したい。換言すれば、マラマッド文学のユダヤ的特質に関して、いかなる面が未解明で、どのような更なる分析の余地があるのかを考究したい。マラマッド文学のユダヤ的特質に関して、今後行われるべき分析への道筋を示すことを本稿の最終目的とする。

I

マラマッド文学のユダヤ的特質を分析した評論群のタイトルを一瞥して分るのは、ユダヤ人固有の言語で書かれたイディッシュ文学との関連に注目した分析が極めて多い点である。その中でも、イディッシュ文学に頻出する喜劇的登場人物 *schlemiel* と、マラマッド文学の登場人物との間の類似性を探求したものが目立つ。例えば、Leslie Field[3]は、“ Portrait of the Artist as *Schlemiel*” において、マラマッドは、長編、短編共に、多様なテーマや基調を導入するために、シュレミールを用いていると指摘する(118)。Field は、フィデルマンが最終的に芸術家のシュレミールとして登場すると解釈し(123)、フィデルマンに対して牢獄の隠喩が用いられている点で、他のマラマッド文学のシュレミール的登場人物との関連性を持つと述べ(128)、一貫してフィデルマンをシュレミールと対置しつつ分析している。

同じく、Sanford Pinsker も、*The Schlemiel as Metaphor* の中で、シュレミールとの関連性に注目しつつ、マラマッド文学のユダヤ的特質を追及する。彼はまず、マラマッドの主要作品は、シュレミールで溢れ(89)、マラマッドのシュレミールは、古典的な民間伝承の人物像と類似すると指摘する(90)。続いて、具体的に、Leo Finkle が、いかなるシュレミール的特質を有するかが分析される(92-93)。さらに、*The Assistant* において、Frank Alpine は道徳次元におけるシュレミールとなり(95)、Morris Bober の葬式における、ラビの頌徳の言葉は、モリスにシュレミールの色彩を加えると指摘される(97)。Pinsker は、*A New Life* においても、マラマッドは Seymour Levin を道徳次元でのシュレミールとして描き続け(100)、レヴィンは、自分で作り出す失敗を好む シュレミール の伝統的側面を有すると眺める(107)。*The Fixer* においても、

最も古典的なシュレミールが登場し、シュレミールは作品のテーマとプロットに調和し、構造的に作品を統一している(117)。Pinsker は、Yakov Bok の描写において、シュレミール描写が、最も伝統的なユダヤ文学に根ざしていると主張する(124)。他方、Pinsker は、ヤーコフの人物像の、シュレミールから離脱している面も指摘している(123)。このように、登場人物と、シュレミールのイメージとが、丹念に比較検討されている。

Ruth Wisse は、“ Requiem for the Schlemiel ”において、マラマッドはアメリカの作家で唯一、ユダヤ人を人間の代表、シュレミールをユダヤ人の代表として描いていると指摘し、シュレミールが置かれる状況か、成功第一主義かの、二者択一を人間は迫られるとマラマッドは認識していると解釈している(161)。Wisse は、マラマッドの登場人物は、シュレミールになる潜在力、苦しみ、損失、苦痛、侮辱を甘受する潜在力を持っているとも眺める(161)。個別の登場人物に関しては、フィデルマンを、シュレミールとしての芸術家を一般化して描いたものであると評価する(163)。Wisse も、シュレミールの概念を作品分析に活用している。

Robert Alter も、“ Jewishness as Metaphor ” において、現実的描写と幻想的描写とを対置させるマラマッドの作風と、ユダヤ民話の特徴との共通性を認め、作中の現実と幻想との結合を可能にするのが、登場人物のユダヤ性であると指摘する(31)。 Alter は、既出の批評家と同様に、マラマッドが、登場人物のモデルとして最もよく用いるユダヤ民話の人物は、シュレミールであり(31)、マラマッドにとって、シュレミールであることは、ユダヤ人であること、また、道徳的姿勢を取ることに等しいと指摘する(32)。Alter も、Wisse 同様に、マラマッド文学の登場人物は、シュレミールであるか、周囲の人を利用する人間であるかの、二者択一になると判断する(32)。また、ヤーコフもシュレミールの色彩を帯び、彼の話し方や思索にはイディッシュ的な皮肉が織り込まれているという(41)。

Sam Girgus は、 *The New Covenant* において、レヴィンを過去から逃れられないシュレミールと分析し(29)、シュレミールとしての資質が彼の信念の強さや確固たる真摯さの源泉であると見る(30)。また、Christof Wegelin も “ The American Schlemiel Abroad ” において、評論のタイトルが示す通り、フィデルマンをシュレミールとして言及している(141, 150)。しかし、どのような面でフィデルマンがシュレミールに通じるのかは、自明の事実として、述べられていない。この姿勢からは、フィデルマンをシュレミールとして解釈するのが常識となっていることが分る。同じく、Josephine Knopp も、 *The Trial of Judaism in Cotemporary Jewish Writing* において、モリス、フランク共にシュレミールに類似している点を指摘する(110)。Alan Berger も *Crisis and Covenant* において、 Shmuel を典型的なシュレミールであると指摘し(176)、シュレミールとしてモリスとヤーコフを対比しつつ分析している(176)。Edward Abramson は *Bernard Malamud Revisited* において、登場人物をシュレミールとして類型化され

ることを嫌うマラマッドの発言を考慮に入れた上で、レヴィンとシュレミールの類似性を指摘している(54-55)。Sheldon Hershinow も Bernard Malamud において、モリス、ヤーコフ、フィデルマンと、シュレミールとの類似性に言及している(9, 38-39, 63)。

以上の通り批評を概観すると、登場人物とシュレミールとの共通性の分析が、マラマッドのユダヤ的特質の考察の際には、際限なく反復されていることが分る。ここに、マラマッド文学のユダヤ的特質の分析における、一主流を明確に確認できる。シュレミールはイディッシュ文学の典型的登場人物であり、マラマッド文学の登場人物とシュレミールとの関係を議論することは、必然的に、マラマッドとイディッシュ文学（語）の関連性に目を向けることである。シュレミールの概念を援用せずに、マラマッドとイディッシュ文学（語）との関係を探求した評論も数多い。それらを以下に概観したい。

Ⅱ

Earl Rovit は“The Jewish Literary Tradition”において、『魔法の樽』所収の諸短編が、主題、話法の点でイディッシュ文学の伝統に連なると主張する一方で(5)、物語の意味の解釈は、読者の判断に委ねられる点で、マラマッド文学はイディッシュの伝統から離脱していると指摘する(7)。さらに Rovit は、マラマッドはイディッシュの背景たるアイロニーを活用しているが、マラマッド自身の見方を具現化するために、それを超えているという(7)。Rovit は、マラマッドが、イディッシュの豊穣な資源を、現代の短編の素材として使えることを示したと見ると同時に、物語の重大な局面において、マラマッドはユダヤ的な皮肉に執着し、その結果、登場人物がグロテスクになっている例もあると考える(10)。Rovit は、マラマッドの限界と能力が共に、イディッシュ文学の伝統に端を発していると考えている(10)。Rovit は、マラマッドの作風とイディッシュ文学の特徴との一致、不一致を丹念に探求している。

Lillian Kremer は、イディッシュ文学の登場人物を最も適切な形でアメリカ文学に移入した作家が、マラマッドであると指摘している(123)。Kremer は具体的に、イディッシュ文学においては、ユダヤ教の *tzaddik*（一般人のために神との間に介在し、神の恵みを伝える指導者）が、シュレミールとしての弟子に対して、道徳的な指導を行うパターンが登場する事実を紹介する(125)。これに照応する形で、精神的な次元での探求者と、ツァディクの描写を通した救済のテーマが、“The Magic Barrel”や『フィデルマンの絵』で繰り返されていると Kremer は観察している(128)。同様に Pinsker も、『アシスタント』のモリスは世俗的なツァディクとして特徴付けられ(94)、『フィデルマンの絵』では、Shimon Susskind が、アメリカ系シュレミールであるフィデルマンに対して、精神的指導者、ツァディクとなっていると解釈する(129)。このように、Pinsker も、マラマッド文学とイディッシュ文学との照応関係を明示する。加え

て、Pinsker は、サスキンドがユダヤ的説教を行っている点(134)、「魔法の樽」と、『フィデルマンの絵』の第1番目と 5 番目の短編が、ユダヤ的な概念を伝えている点を指摘する(135-36)。しかし、何を根拠にユダヤ的と指摘できるかは明言されていない。

Allen Guttmann も“ All Men Are Jews ”において、『魔法の樽』に含まれる短編は、イディッシュ文学を代表する小説家 Sholom Aleichem の作品や、Hassidism （ユダヤ神秘思想）の古い慣習に則って書かれた物語に類似していると指摘している(152)。Ihab Hassan も *Radical Innocence* において、マラマッドの見方は、イディッシュの民間伝承の手管やユダヤ的なジョークに一部、根ざしていると主張している(161)。さらに Hassan は、マラマッドのスタイルの功績は、希望と苦悩をイディッシュの話し方のリズムを用いて伝えた点にあると述べる(167)。Victoria Aarons も、*A Measure of Memory* において、マラマッドの登場人物は、アレイヘムの作品の人々と同様、自分の苦痛を確実にする状況を作り出すと指摘する(122)。

Dorothy Bilik は、*Immigrant-Survivors* において、イディッシュ文学流の皮肉をマラマッドは現代的な形で活用し(54)、モリスや Manischevitz の話す英語は、イディッシュ語の影響を受けていると指摘する(68-9)。他方、Bilik は、マラマッドの描くユダヤ系移民は、彼ら共通の苦しみ、慈悲、責任感などの遺産を、後世に伝えることが可能な立場にあると述べる(75)。アレイヘムの登場人物を思わせるマラマッドの登場人物は、死滅した文化の断片を象徴し、今住んでいる新しい世界と相互関係を持たない(77)。しかし、彼らは、若い世代に先のユダヤ遺産を受け渡すことができる人々として描かれ、この形でマラマッドは、ユダヤ移民の描写を通して、東欧の失われたユダヤ民族の世界を祝福している(77)。この作業を、イディッシュの語り口を第一の手段としてマラマッドは行い(77-78)、世俗化したものであれ、ユダヤ遺産を後世に伝えることが、マラマッド文学の重要なテーマとなっていると、Bilik は判断する(79)。この論考は、単にイディッシュ語と作品との関連性を指摘したのみならず、イディッシュ語が、作中でどのような役割を担っているかまで探求した点で、独自性が見られる。

他には、Sheldon Grebstein が、“ Bernard Malamud and the Jewish Movement ”において、マラマッドはイディッシュ語をアメリカに輸入し(178)、翻訳不可能なイディッシュ語の特質を英語で表現し(196)、マラマッドの言葉遣いはイディッシュ語の音声を喚起すると指摘する(201)。Grebstein によると、イディッシュ語にマラマッドが通じている事実、イディッシュ語を英語に翻訳する彼の能力が、作品から分るという(202, 204-5)。Hershinow も、『アシスタント』に関して同様の指摘を行っている(41)。Robert Solotaroff も *Bernard Malamud* において、マラマッドはイディッシュ語の香りを持つ英語を使用することにより defamiliarization の効果を期待し(20)、登場人物の深層にまで読者を導こうとしていると述べる(21)。さらに、Solotaroff は、マラマッドはイディッシュ訛の英語の使用により、移民先でのユダヤ系移民の居心

地の悪さを表現していると見る(22)。Sidney Richman も、*Bernard Malamud* において、マラマッドは、19世紀東欧のイディッシュの物語の伝統に属し、アメリカを舞台とする作品に、東欧のユダヤ人強制集住地域を思わせる背景を描きこんでいると指摘する(25)。Richman は、マラマッドが19世紀のイディッシュ民話に見られる陰鬱で不毛な世界を再現し、マラマッドの喜劇の方向性がアレイヘムと同質であると考える(26)。このように、イディッシュ文学（語）とマラマッド文学との関連性に関する議論も際限なく反復され、マラマッド文学のユダヤ性分析の際の常套手段であることが明確に確認できる。

Ⅲ

イディッシュ文学との関連性以外の視点からなされた、マラマッドのユダヤ性の分析を以下に眺める。Leslie and Joyce Field は、“ Introduction ” において、マラマッドの登場人物は常にユダヤ的な環境に積極的に関与すると解釈するが(5)、この解釈の具体的な論拠は述べられない。また、父親探しのパターンがマラマッド文学に登場するが、歴史的に見て、ユダヤ民族の族長の Abraham、Issac、Jacob に始まる父親探しは、ユダヤ人が書いた書物の中核をなし(5-6)、この点で、マラマッド文学はユダヤ的であると Field は見ている。同じく Hershinow も、マラマッド文学に頻出する父親探しの主題は、旧約聖書に組み込まれ(144)、マラマッドによる父親探しのテーマの原型は、古代イスラエル人の神との関係に見出されると指摘する(144-45)。さらに、Hershinow は、旧約聖書的な問題提起をマラマッドは常に作中で行っており、マラマッドの姿勢には旧約聖書の Job の物語の影響が認められると考える(139-40)。上記の通り、ユダヤ教との対置により、マラマッド文学のユダヤ的特質を明示しようとする姿勢も数多い。既出の Pinsker も、「魔法の樽」の最後の場面におけるレオ・フィンクルは、聖書の Hosea と似ており、一方、モリスは世俗的なツァディクとして描かれていると指摘し、宗教的視点を作品分析に導入している(94)。前出の Kremer も、マラマッドの作風が、旧約聖書やタムルード（ユダヤ教徒の宗教生活に関する法規についての議論が展開する大部な書物）やハシディズムと相似関係にあると見ている(124)。

前出の Knopp も、ユダヤ的価値観が堕落せずに残存し、ユダヤの伝統が今日のアメリカでの生活の中においても適切な規範である点を強調する傾向が、マラマッドにあると主張する(109)。ヤーコフの神への非難はヨブ記の伝統に位置し、特にユダヤ的な文脈に置かれている(116)。対照的に、伝統的なユダヤの道徳に従う(114)シュムエルは、ヨブの立場に同意している(116)。Knopp は、時に神に抵抗し、時に忍従するヤーコフの描写を通して、作中で、ユダヤ教が試されていると考える(117)。ヤーコフの懐疑主義がユダヤ的な教義の価値を検証し、ヤーコフがユダヤ教特有の道徳律を受容する様子を通して、ユダヤ教が正当化されていると

Knopp は解釈している(125)。やはり、ユダヤ教との関連で、マラマッドのユダヤ性が分析されている。

前出の Aarons は、“ Idiot First ” の Mandel たちは、自分の語りへの傾聴を求める点で、聖書のヨブの嘆願やアレイヘムの登場人物に類似すると指摘する(94)。彼らは、聞き手の道徳的良心に働きかけようと試みている(95)。憐れみはユダヤ的倫理観の基礎を形成するが、その憐れみをマラマッドの登場人物は求めていると Aarons は見る(96)。また、マンデルと息子の関係は、アブラハムとイサクの関係を連想させるという(96)。Aarons は、マラマッドの登場人物は、慈善を企図した行動によって、旧約聖書の倫理観に依拠して行動していることを証明できると指摘する(97)。ここでは、旧約聖書と対置する形で、マラマッド文学とユダヤ教との関連性が探られている。既出の Bilik も、マラマッド文学には古代のユダヤの範例が認められると述べ、弟子に英知を授ける Hassid （ユダヤ教の神秘主義的一派）の師匠の生き方のパターンが、 3 作品で反復されていると指摘する(54)。Bilik は、モリスがヨブのように苦しむことに注目し(55)、モリスの発言の断固とした様はヨブ的でありタムルード的であるとも述べている(56)。同じく、既出の Field も、“ Portrait of the Artist as Schlemiel ” において、最終場面で、フィデルマンにおいて、タムルード的な原理が機能していると述べる(129)。しかし、具体的に登場人物の如何なる面に、タムルードに通じる要素が如何なる形で読み取れるのかは、具体的には論証されていない。 Eileen Watts も、“ The Holocaust's Legacy in Three Malamud Stories ” において、“ The Lady of the Lake ”は、旧約聖書のアブラハムのエピソードを下敷きにしていると指摘する(148)。

既出の Berger は、『修理屋』のシュムエルの主張には、古代ヘブライ神秘哲学の響きが聞きとれると考える(177)。Berger は、ユダヤ教が、マラマッドの登場人物の道徳的な強靭さを決定することはなく(177)、伝統的なユダヤ教の役割を減退させる形で、ヤーコフの道徳的責任感が描かれていると指摘する(180)。また、『修理屋』では、ユダヤ教の伝統が、現代的な状況の変遷に対応できない様子が描かれていると述べる(183)。最後に Berger は、マラマッドが、ユダヤ教を超越した人間の登場を祝福していると結論付ける(185)。先の Knopp とは正反対の結論に至る形で、ユダヤ教の理念と作品内容との比較検討が丹念になされている。

さらに、既出の Grebstein は、マラマッドが有意義な苦悩というテーマを展開する点に注目し、苦悩が苦しむ人を贖うという発想が、古代ユダヤの預言者の伝統に則ったものであることを指摘し(179)、この形でマラマッド文学のユダヤ的特質を明示する。苦しみが意味を持たない唯一の主人公が、『ナチュラル』の非ユダヤ人 Roy Hobbs である点にも注意を払う(181)。また、Grebstein は、レヴィンが、自分の子を身ごもった、愛してない女性を妻として受容するのは、“ some nutty Jewish compulsion for self-sacrifice ” ゆえであると解釈している(183)。

しかし、ここにおいても、なぜユダヤ的と評価できるのかの具体的な論証はない。既出の Abramson も、マラマッドは、ユダヤ教の倫理観を行動の基準として利用し(25)、旧約聖書を志向する方向性を有していると述べている(141-42)。前出の Rovit も、登場人物とヨブの類似点や、ヨブの疑問が作中で繰り返されている点を指摘する(8)。以上の通り、ユダヤ教の有様と照応させる作業を通して、作品内容のユダヤ性を追及するあり方も、マラマッド批評の大きな流れを形成している。

Ⅳ

次いで目立つのが、マラマッドの対ホロコースト姿勢を基準として、彼の作品のユダヤ性を判定する手法である。例えば、既出の Berger は、『修理屋』がホロコーストを予見し(175, 178, 183)、ヤーコフが出会うロシア人の反ユダヤ主義は、ホロコーストの前兆を成すと解釈する(178)。また、この作品で、最も激烈な反ユダヤ主義が表現されているとも評価している(176)。Berger はまた、ホロコーストを扱った 2 短編において、ナチの恐怖に曝されていないと感じる、アメリカのユダヤ人の愚かさが強調されているとも指摘している(96)。先に見た Alter も、『修理屋』によって、マラマッドはホロコーストにアプローチできたと考える(38)。

既出の Watts は、ユダヤ人を絶滅させようとする環境の中で生き延びるために、いかにユダヤ人が自身を変えることを強いられたかが、ホロコーストを背景とする3短編共通のテーマであると見ている(140)。例えば、“ The German Refugee ” では、ユダヤ系ドイツ人がアメリカで生存するためには、自分とドイツ語を他の存在に変えることを余儀なくされる状況が描かれていると Watts は考える(140)。“ Man in the Drawer ” でも、Feliks Levitansky は自身を物語に変えており、やはり、ユダヤ人は生存のために自分を変えざるを得ないという視点が提示されている(147)。「湖上の貴婦人」を含め、ユダヤ人が、非ユダヤ人により構成された社会で成功するためには、自己のユダヤ性の放棄が必要となる悲劇を、 3 短編は共通して描いていると Watts は見る(152)。Abramson は、苦悩の不可避性を受け入れることが人間の道徳の可能性を高めるというマラマッドの発想は、ユダヤ人が他民族以上に苦悩を強いられた歴史的事実と呼応していると見る(142)。

正反対に、マラマッドの対ホロコースト姿勢を、現実のホロコーストの有様との絡みで非難する評論も散見する。まず、 Lawrence Langer は “ Malamud's Jews and the Holocaust Experience ” において、マラマッドの登場人物は状況を問わず苦しむ才能を与えられ、この才能が彼らを絶望から救う一方、マラマッドは苦悩を主題として扱いながら、ホロコーストに僅かしか触れていないと主張する(116)。Langer は、マラマッドの登場人物が、ホロコーストの世界とは別世界に存在し(117)、マラマッド文学は、ホロコーストの恐怖を喚起しないと指摘する

(118)。続いて Langer は、ホロコーストの犠牲者が強いられた筆舌に尽くしがたい無力さと恐怖を、マラマッドが現実に即して描かない点を執拗に非難し続ける(118-21)。Langer は、ロシアのユダヤ人虐殺やホロコーストの被験者ユダヤ人よりも、非体験人物の方に焦点が当てられる作品傾向も問題視する(120,123)。全体的に Langer は、ホロコーストのイメージを喚起する小説に、マラマッド自身の人間観を盛り込んだ点を強く批判している。

既出の Leslie Field による、“Bernard Malamud and the Marginal Jew”も、同様の視点からマラマッド文学を分析する。Field は、マラマッドがユダヤ的な事柄に関与するユダヤ人を描き、マラマッド文学において、ユダヤ思想とユダヤ人固有の状況が中心に位置する点を認める(98)。他方 Field は、マラマッドがユダヤ人にとって最も関心のあるホロコーストとイスラエルの話題を扱わないため、それらの話題を描くことに関して臆病であると評価する(113)。例えば、モリスはロシアのユダヤ人虐殺を知りながら明確にはフランクに語らず、ユダヤ人の話題も僅かしかフランクに語らない(113)。これらの作風から Field は、ユダヤ人の過去に閉じ込められるのを拒否し、ユダヤの伝統に厳密さを欠いた形で属する、周辺的ユダヤ人としてマラマッドを位置付けている(114)。

既出の Bilik も、マラマッド以上にホロコーストの生存者と移民について頻繁に書く現代アメリカ作家はいない一方で、マラマッドの作品でホロコーストの生存者は主人公として描かれず、『修理屋』を除いてはホロコースト体験に作者が正対しない点に注目する(53)。例えば、『アシスタント』において、ホロコーストの恐怖をマラマッドは意識しているが、ホロコーストは作品の周辺部に位置するに過ぎない(56)。『修理屋』も、ホロコーストを曖昧な形で喚起するのみである(64)。このようにマラマッドがホロコースト体験を直接表現しない理由を、Bilik は、どの側面を描くのかの選択に関して困難が付随するがゆえと判断する(66)。しかし、マラマッド以上にホロコーストの生存者をコミカルに描く作家はおらず(59)、その喜劇調の書き方は、アメリカの作家と、ヨーロッパのホロコースト体験との間の距離の甚大さを物語ると Bilik は見る(75)。最後に Bilik は、ホロコースト後の感覚を、移民の生存者の実質のなさの中に、マラマッドは描き出したと結論付けている(77)。

既出の Alter も、ユダヤ系登場人物が倫理的価値の象徴としてのみ描かれる点を根拠に、マラマッドはユダヤ系登場人物を描くが、ユダヤ人に関しては語らず、ユダヤ人が置かれた状況も描かないと指摘している(30)。完全に正反対の結論に至ることもあるが、ホロコーストと作品内容との関係の分析も、マラマッド文学のユダヤ的特質を分析する際の常套手段となっている。

V

以上４種の分析手法に属さない批評に目を移すと、Karen Polster は“ America and the History of the Jews ”において、ユダヤ人のアイデンティティの構造を、全世界的なユダヤ史の視点から再吟味するために、“ The Last Mohican ”において、マラマッドは登場人物をアメリカ外に連れ出していると見る(59)。Polster は、自分にとってのユダヤ人の歴史の重要性に気付かないことに、フィデルマンの芸術家としての失敗が起因すると解釈する(61)。他方、サスキンドは、ユダヤ人の歴史の断片の集合体となっている(63)。この形で「最後のモヒカン族」は自分の過去を否定しようと試みるフィデルマンを描き(64)、過去を記憶すべきと主張していると分析する(65)。この作品は、他人からの自己の分離を目指すフィデルマンの姿勢が、サスキンドが象徴するユダヤ人への迫害をもたらした点も描いていると Polster は指摘する(66)。また、「最後のモヒカン族」において、マラマッドは1950年代のアメリカのユダヤ人の共同体の同化の危機について説明し(67)、ユダヤ人の多様な文化・歴史に目を向けることが、人間が相互に対して負うべき責任の再発見に至る点を示唆している(67-68)。最後に、マラマッドはユダヤ人の過去を全人類の未来を予見するために活用していると、Polster は結論付ける(68)。この論考は、ユダヤ教的背景やイディッシュ文学に触れずに、マラマッドにとってのユダヤ人の過去の意義を考察した点で、既出の論文とは趣を異にしている。

さらに、別視点からの批評を探すと、Cynthia Ozick は“ Literary Blacks and Jews ”において、1950年代末には黒人とユダヤ人とが同じ立場であったが、*The Tenants* では黒人とユダヤ人とが憎悪の念を向けあい、この作品の出版10年後においても、作品内容は現実と合致していると判断している(81)。この原因を Ozick は“ Angel Levine ”が書かれた当時には存在しえた希望が、その後、完全に夢物語になってしまったためと見る(89)。次いで、Ozick は、無学で手に負えない下端として Willie Spearmint が描かれる一方で(89)、ユダヤ人 Harry Lesser は仕事に厳格で訓練されていると見る(90)。このように、二人には上下関係が設けられ、その結果、二人の間に生じる文学論争は公平でなくなったと Ozick は判断する(90)。マラマッドがウィリーを黒人運動の方針を模倣したステレオタイプとして描いたために、作品の質を低下させたとも Ozick は見ている(94- 5)。さらに、「天使レヴィン」の内容が幻想であることを、『テナント』の最後で作者は認めていると考えている(97)。この批評は、作品内容と、同時代のユダヤ人の現実との関連性を注視している点が、既出の批評とは大きく異なっている。

他方、Walter Shear は、“ Culture Conflict ”において、『アシスタント』の中で、古来のユダヤ的価値観と、実用性と成功とを求めるアメリカの価値観との衝突が描かれていると分析する(208)。Shear は、マラマッドがアメリカ文化を喜劇的に脚色し、アメリカの夢を悪夢として描き出す一方、フランクなどの登場人物を通して中産階級のアメリカ文化の典型例を具現化し

ていると解釈する(209)。マラマッドは、アメリカ人にとっての典型ともいえるフランクの夢想を彼のより現実的な体験と併置することにより、ロマンチックな性格を持つアメリカ文化を批判していると Shear は解釈する(210)。モリスの生き方が Abraham Lincoln を想起させることからも、モリスはアメリカの歴史の一部となるが、アメリカ文化が規定する夢に沿っては生きていない(212)。逆に、モリスはユダヤ思想の産物であり、ユダヤ人思想家 Martin Buber と類似していると Shear は指摘する(216)。これらを根拠に、マラマッドはユダヤ的価値観に立脚して作品を書いていると Shear は考えている(218)。Abramson も同じく、『アシスタント』において、ユダヤの伝統と現代アメリカの価値観とが対照をなし(26)、アメリカ的価値観が強く糾弾されていると考える(27)。これらの評論では、Ozick の場合と同様に、作品とほぼ同時代の現実を対置させつつ作品解釈が展開している。特に、作品執筆時のアメリカ文化と、ユダヤ思想とを対置する分析手法が採用されている。他方、Shear は、ユダヤの歴史の残響が多くの作品に残り、作品の深みを増しているとも指摘する(4)。

マラマッドのユーモアを手掛かりに、作品のユダヤ性を指摘した論考もある。先の Grebstein は、マラマッドのユーモアは、幻想的で途方もない事柄を平凡な物であるかのように扱う点で(186)、また、対ユダヤ人偏見への反撃を企てている点で、ユダヤ的と考えられると指摘する(192)。Rovit も、マラマッドのユーモアを、自己を嘲笑するか、もしくは、嘲笑の対象が曖昧な点でユダヤ的と評価している(5)。Hershinow は、絶望を認識しつつ希望を持続させることを可能にし、悲劇的要素と喜劇的要素とを合体させるユダヤ的ユーモアを、作品を統一する手段としてマラマッドは用いたと指摘する(15)。また、マラマッド文学には、幻想的な出来事を陳腐なものとして描くユダヤ的ユーモアの特徴が見られると Hershinow は指摘している(39)。

作品のユダヤ的特質の分析ではないが、作中のユダヤ人の象徴性を考察した論考も多い。例えば、マラマッドにとって、ユダヤ人は戦後の感覚を象徴する存在であると、既出の Pinsker は指摘する(87)。Berger は、苦悩を通して道徳的成長を達成できる能力によって、人間は象徴的な意味でのユダヤ人になる点をマラマッドは強調していると述べる(178)。また Berger は、マラマッドの『修理屋』が、個々のユダヤ人が誰であれ、ユダヤ人を代表する存在と見られる点を示唆していると解釈する(185)。Alter は、ユダヤ人を投獄された人間の暗喩で捉えるのがマラマッドの特徴であり(33)、『修理屋』では、万人が必然的に環境や歴史からの影響力に曝されるあり方の一例としてユダヤ人が用いられていると解釈する(42)。これらの評論の共通項として、作中のユダヤ人が帯びている象徴性と、現実のユダヤ人のあり方との照応関係の分析にまでは展開しない点がある。

結論

以上の通り俯瞰すると、マラマッド文学のユダヤ的特質の分析に関しては、イディッシュ文学、旧約聖書、タムルードなど、ユダヤ人が遺した過去の文筆活動との関連性に焦点を当てる手法が、圧倒的主流を成している。あるいは、ホロコースト等のユダヤ人が共有する過去に、作品が如何なる形で対応しているかに焦点を当てつつ分析がなされている。逆に言えば、作品内容と、作品執筆とほぼ同時代のユダヤ人の現実との関連性は、殆ど明確化されていない。さらに言えば、マラマッドが居住していたアメリカに在住のユダヤ人の典型的な精神構造、価値観、思考様式など、歴史以外の現実と作品傾向との関連性を分析した評論が稀少である。それゆえ、在米ユダヤ人の現状を視野に入れた Ozick の評論は異彩を放つ。ただし、Ozick の評論は、ユダヤ人と黒人の関係にのみ焦点を当てる形で展開していた。つまり、作品執筆時とほぼ同時代のユダヤ系アメリカ人の現実一般との関連性において、マラマッド文学のユダヤ的特質を分析する余地が、大いに残されている。

既出の批評における欠落部分を探し続けると、ユダヤ的特質との絡みで論ぜられる作品の特徴であるが、ユーモアやホロコーストへの意識など、作品の何らかの限定された一側面が俎上に上がることが多い。人物描写や作品のプロットが、作品全体として醸し出す世界観、人間観などが、いかなる点でユダヤ的と評価できるのかに関しては明確化されない。また、既に確認した通り、ユダヤ系登場人物の描写に潜在する象徴性などの一貫性が考究されることはあっても、それと、現実のユダヤ人の実情との関係に関しての議論にまで発展することはない。

また、マラマッド文学のユダヤ的特質の分析が行われる際に、ユダヤ人の歴史や現実を具体的に二次資料によって例証しつつ行った例は、絶無である。ユダヤ人に関する歴史や現実の実態は、ユダヤ史などの二次資料に記述された現実による例証なしには明示できないが、この形式で、論考の中で具体的にユダヤ人の現実や歴史の提示が行われることは殆どない。マラマッドのユダヤ性を分析した論文の引用文献リストを見ても、現代のユダヤ文化、現代のユダヤ人の価値観、ユダヤ史に関する書物は、ほぼ皆無である。そのために、作品・作者のある特徴がユダヤ的特質を有しているという主張は、ユダヤ的特質の論拠が脆弱な形態で展開され、結果的に、印象に終始した論述に終わっている。

このように、過去の批評で欠落している諸側面を確認すると、具体的に如何なる研究課題が残されているかが判明する。二次資料によって詳細に例証された、マラマッドと同時代のユダヤ人の典型的な価値観、行動様式と対置させつつ、マラマッド文学全体を鳥瞰した際に、それら二つの間に、どのような関連性が判明するかが、完全に未解明の領域と判断できる。二次資料によって厳密に裏打ちされた現実のユダヤ人の典型的な思考様式や美意識と、登場人物や作品構造が全体として醸し出す、マラマッドの人間観・世界観との間にどのような照応関係が読

み取れるか、この点こそが、マラマッド文学のユダヤ的特質の分析にあって、大きく積み残された課題なのである。

注

1　作家、作品、登場人物は、初出のみ英語で記し、再出の際は邦訳を記す。

2　ドイツ語をベースに、ユダヤ人本来の民族語であるヘブライ語が15%から20%取り入れられた、ユダヤ人固有の言語で、成立後、東欧のユダヤ人の間に急速に広まり、16世紀には、ヨーロッパのユダヤ人の共通語になった。

3　批評家は、初出のみ英語のフルネームを記し、再出の際は、苗字のみを英語で記す。

Works Cited

Arons, Victoria. *A Measure of Memory: Storytelling and Identity in American Jewish Fiction.* Athens: University of Georgia Press, 1996.

Abrason, Edward. *Bernard Malamud Revisited.* New York: Twayne, 1993.

Alter, Robert. "Jewishness as Metaphor." Ed. Leslie and Joyce Field. *Bernard Malamud and the Critics.* 29-42.

Avery, Evelyn, ed. *The Magic Worlds of Bernard Malamud.* New York: State University of New York Press, 2001.

Berger, Alan. *Crisis and Covenant: The Holocaust in American Jewish Fiction.* State University of New York Press, 1985.

Bilik, Dorothy. *Immigrant-Survivors: Post-Holocaust Consciousness in Recent Jewish American Fiction.* Connecticut: Wesleyan University Press, 1981.

Bloom, Harold, ed. *Bernard Malamud.* New York: Chelsea House, 1986.

Field, Leslie. "Bernard Malamud and the Marginal Jew." *The Fiction of Bernard Malamud.* Ed. Richard Astro and Jackson Benson. Corvallis: Oregon State University Press, 1977. 97-116.

---. "Portrait of the Artist as *Schlemiel* (*Pictures of Fidelman*)." Ed. Leslie and Joyce Field. *Bernard Malamud: A Collection of Critical Essays.* 117-29.

Field, Leslie, and Joyce Field, eds. *Bernard Malamud: A Collection of Critical Essays.* New Jersey: Prentice-Hall, 1975.

---, eds. *Bernard Malamud and the Critics.* New York: New York University Press, 1970.

---. "Introduction—Malamud, Mercy, and *Menschlechkeit.*" Ed. Leslie and Joyce Field. *Ber-*

nard Malamud: A Collection of Critical Essays. 1-7.

Girgus, Sam. *The New Covenant: Jewish Writers and American Idea.* University of North Carolina Press, 1984.

Grebstein, Sheldon. "Bernard Malamud and the Jewish Movement." *Contemporary American-Jewish Literature.* Ed. Irving Malin. Bloomington: Indiana University Press, 1973. 175-212.

Guttmann, Allen. "All Men Are Jews." Ed. Bloom. 151-58.

Hassan, Ihab. *Radical Innocence: Studies in the Contemporary American Novel.* New Jersey: Princeton University Press.

Hershinow, Sheldon. *Bernard Malamud.* New York: Frederick Ungar, 1980.

Knopp, Josephine. *The Trial of Judaism in Cotemporary Jewish Writing.* Urbana: University of Illinois Press, 1975.

Kremer, Lillian. "Reflections on Transmogrified Yiddish Archetypes in Fiction by Bernard Malamud." Ed. Avery. 123-38.

Langer, Lawrence. "Malamud's Jews and the Holocaust Experience." Ed. Salzberg. 115-25.

Ozick, Cynthia. "Literary Blacks and Jews." Ed. Leslie and Joyce Field. *Bernard Malamud: A Collection of Critical Essays.* 80-98.

Pinsker, Sanford. *The Schlemiel as Metaphor: Studies in the Yiddish and American Jewish Novel.* Carbondale: Southern Illinois University Press, 1971.

Polster, Karen. "America and the History of the Jews in Bernard Malamud's 'The Last Mohican.'" Ed. Avery. 59-68.

Richman, Sidney. *Bernard Malamud.* New York: Twayne, 1966.

Rovit, Earl. "The Jewish Literary Tradition." Ed. Leslie and Joyce Field. *Bernard Malamud and the Critics.* 3-10.

Salzberg, Joel, ed. *Critical Essays on Bernard Malamud.* G. K. Hall: Boston, 1987.

Shear, Walter. "Culture Conflict." Ed. Leslie and Joyce Field. *Bernard Malamud and the Critics.* 207-18.

Solotaroff, Robert. *Bernard Malamud: A Study of Short Fiction.* Boston: Twayne, 1989.

Watts, Eileen. "The Holocaust's Legacy in Three Malamud Stories: 'The German Refugee,' 'Man in the Drawer,' and 'The Lady of the Lake.'" Ed. Avery. 139-52.

Wegelin, Christof. "The American Schlemiel Abroad: Malamud's Italian Stories and the End of American Innocence." Ed. Salzberg. 139-51.

Wisse, Ruth. “Requiem for the Schlemiel.” Ed. Bloom. 159-65.